

Leo Weisgerber における sprachliche Zwischenwelt の概念について (1)

金子 亨

Zum Begriff „sprachlicher Zwischenwelt“ L. Weisgerbers (1)

TOHRU KANEKO

Ich darf vielleicht . . . etwas anspruchsvoll formulieren :
es geht heute gar nicht um eine Entscheidung《Strukturalismus
oder inhaltbezogene Sprachwissenschaft》, sondern frucht-
bar ist nur ein 《offener Strukturalismus (im Sinne von
《Systemerprobung》) als inhalts- und wirkungs-bezogene
Sprachwissenschaft. (Glinz)¹⁾

1. は し が き

1.1. 緊固な構成をもった理論体系においては、ひとつひとつの概念と用語とが、あたかも城楼を成す柱梁のごとくに、その荘麗な構成を支えているものであるから、理論体系全体の構成にとって最も重要な、言わば大黒柱となる概念を求め、この中心的概念と相互に関係し合う諸概念との結合を究明することは、その理論の全的な把握にとって不可欠の前提条件となる。また、そうした中心的概念が見出され、かつ理論体系のなかで正しい位置に据えられたとき、突如として、理論全体の絢爛たる容姿が我々を驚かすものなのであろう。

Leo Weisgerber の「言語的・中間世界」(sprachliche Zwischenwelt) はまさにこのような概念なのであって、その実在性を前提としなければ、氏の全理論体系は、もはや存立し得ないであろう。たしかに、Weisgerber の言語理論の Façade は、「母国語的世界像」(muttersprachliche Weltbild) と「母国語的世界形成」(muttersprachliche Gestaltung der Welt) の二色で彩られている。そして、静態的言語研究の平面での氏の根本概念は、たしかに「言語内容」(Sprachinhalt) の「仮説」であるとすべきであろう²⁾。だが、Weisgerber が齢 65 才を越えてなお不断に自己を更新してやまず、自己の理論の新たな展開を試みているのを見るとき³⁾、氏の理論の礎石を言語的・中間世界の発見に見ることは単に「言語内容」の概念の把握のために、このことが必須な前提であるからだけでなく、このことによってはじめて氏の理論の

1) H. Glinz: Die innere Form des Deutschen 3 Aufl. 1963 S.7.

2) W. Porzig: Das Wunder der Sprache 3 Aufl. 1962. S.107ff. 参照

3) 例えば Das Gesetz der Sprache (1950) は、特に1960年以降の理論の発展によって、Das Menschheitsgesetz der Sprache (1964) の表題のもとで全面的に書き改められており、主著 Vom Weltbild der deutschen Sprache (1 Aufl. 2 Aufl. 1954, 3 Aufl. 1962) も第3版後、表題も Von den Kräften der deutschen Sprache と改められ、Bd. I は Gründzüge der inhaltbezogenen Grammatik, Bd. II. は 2 Aufl. では Die sprachliche Erschliessung der Welt., 3 Aufl. Die sprachliche Gestaltung der Welt. 又, Bd. III は 3 Aufl. 以降新たに Die Muttersprache im Aufbau unserer Kultur, Bd. IV も同じく, Die geschichtliche Kraft der deutschen Sprache として刊行されている。

全射程を見通し得るといふ理由からも、みのり多い成果をもたらすことになるろう。

1.2. F. de Saussure が現代の言語理論の祖であることは言うまでもない。それ故、Saussure 以後のすべての言語理論は、de Saussure の理論（もちろんドグマとしてではなく）の発展の系列のうえで、その正しさが検証されるべきものであるとしても過言ではなからう。現代音素論は、このような発展の過程における最も重大な成果であったが、さしあたり、Glossematik の系列と、N. Chomsky の理論、更に General Semantics とに関する評価をひとまづ割愛するとすれば、少くとも de Saussure の記号論における《concept》⁵⁾の側面の研究においては、L. Hjelmslev も言うように⁶⁾、Leo Weisgerber は de Saussure の正統的嫡子とみなされるべきである。一方で、Leo Weisgerber は、みづから語っているように⁷⁾、W. v. Humboldt の嫡子でもある。だが、ここには理論の折衷や修正があるのではない。むしろ、L. Weisgerber の言語理論は、Saussure 学にもとづいたところの、Humboldt の言語理論の20世紀的展開と言うべきである。

2. Humboldt—Saussure—Weisgerber

2.1. L. Weisgerber の言語理論における第一の問題は、W. v. Humboldt の次の著名な命題に関するものである：

Sie (die Sprache) selbst ist kein Werk (Ergon), sondern eine Tätigkeit (Energiea). Ihre wahre Definition kann daher nur eine genetische sein. Sie ist nämlich die sich ewig wiederholende Arbeit des Geistes, den artikulierte Laut zum Ausdruck des Gedankens fähig zu machen……aber im wahren und wesentlichen Sinne kann man auch nur gleichsam die Totalität dieses Sprechens als die Sprache ansehen.⁸⁾

我々にとって、この命題に含まれる最も重要な問題のひとつは、ここで Ergon ではなく Energiea であると規定された Sprache が、de Saussure の Langue⁹⁾ とどのような関係にあるかという点である。周知のように、de Saussure は Langue を定義するにあたって、Langue は「個人の脳裡に陰在する文法体系であり」、「parole とは趣を異にし、切離して研究し得る対象であり」、それは記号の体系にほかならず、「個人に外在する」ところの「社会的習慣の総体」であると言う¹⁰⁾。このようにして、de Saussure の Langue は、Humboldt の Energiea としての Sprache のように、動態的な観点を含むものではなく、もっぱら静態的な体系であるように見える。事実、それがひとつの既成の体系であり、具体的対象によって構

4) 真の言語学研究の階梯とされている leistungbezogen, wirkungbezogen な研究における主要概念「世界のことば化 (Das Worten der Welt)」の理解にとって、この点は特別な配慮が要求される。

5) Ferdinand de Saussure: Cours de linguistique générale の小林英夫教授訳「ソシュール言語学原論」(第15刷)では、この concept は「概念」とされているが用語の混乱をさけるため、原語をそのまま使用する。Langage, Langue, Parole についても同様。

6) L. Hjelmslev: Omkring sprogteoriens grundlaeggelse (1943) F. J. Whitfield. Prolegomena to a Theory of Language. 1961 p. 47.

7) Von den Kräften der deutschen Sprache (以下 Kräfte と略称) Bd. I. : Grundzüge der inhaltbezogenen Grammatik. Bd. III. 1962. (以下 Bd. I. と略称) S. 22ff.

8) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften Bd. VII. S. 47ff. Werke in 5 Bdn. 1963, Bd. II. S. 418. (ここで genetisch とは、起源に関する問題ではなく、L. Weisgerber の言う energetisch < Energiea の意味であることに注意したい。)

9) 5)参照。

10) Ferdinand de Saussure: Cours de Linguistique Générale. ³1962. pp. 30-32, p. 112, p. 124.

成された総体であることは、Cours のなかで、次のように明確に語られていることから明らかであろう。

La langue est un système dont toutes les parties peuvent et doivent être considérés dans leur solitarité synchronique.¹¹⁾

de Saussure の Cours が彼自身の筆になるものでないための信憑性の問題はさておくとしても、確かに服部四郎教授の言われるように¹¹⁾、この概念は極めて「暗示的であるけれども、そのまま受け入れることはできないものである」のかも知れぬ。同様なことは、Humboldt の上述の発言にいっそう多く当てはまる。もっとも、服部教授の「そのまま受け入れる」と言われるのは一言半句に拘泥し、逐語的な「解釈」をほどこすことは無意味であるという趣旨のものであろう。だが、このように明確に定義しがたい概念を相互に比較することが、それ故にまったく不可能であると主張することはできない。なぜなら、これらの概念がそれぞれの理論体系のなかで占める位置をできる限り明らかにし、その概念の負担量の総体をもって定義と看做すことは可能であるだけでなく、方法的な必要であると考えられるからである。一方で、Langue の概念の規定にあたっては、いまひとつ別の困難が伏在することを知らねばならぬ。それは、ドイツ語 Sprache が、menschliche Rede, Sprachsystem などの内容を同時に含んでいるという、諸国民の母国語に内在する対象把握の様式の相異に関係する困難である。この点については、Cours のなかでも、Sprache が Langue と Langage の双方を「表わし得る(veut dire)¹²⁾」と言われているし、H. Lommel 訳ドイツ語版では、Langage=menschliche Rede, Langue=Sprache, Parole=Sprechen とされており¹³⁾、また、W. Porzig も Langue にたいして Sprachsystem を引き当てている¹⁴⁾。L. Weisgerber は、言語社会学を提唱し母国語の法則を言語研究の第一義的研究課題とする立場から、Langue に対して Muttersprache なる概念を見ている¹⁵⁾。H. Glinz についても事情は大同小異であって、彼は Langue を Sprache als System と規定し¹⁶⁾ それは「諸要素の宝庫であり、既式の規範へと諸要素を導いて行くために必要な導管である」と言う¹⁷⁾。これらの例を見ただけでも、de Saussure の Langue を Humboldt 的な動態概念 Energeia ではなく、逆に、これを構成する言語記号と同様に、objets réels¹⁸⁾、つまり静態的な体系と理解することが正当であるように見える。従って、Humboldt の言う Energeia を wirkende Kraft, Erzeugende などの動態的な¹⁹⁾、あるいは上掲の文中の genetisch な何ものかであると、さし当り不明確に規定した場合においても、

11) 服部四郎：言語学の方法，1960. p. 218.

12) F. de Saussure: Cours, p. 31.

13) F. de Saussure: Cours, の H. Lommel 訳ドイツ語版:

Grundfragen der allgemeinen Sprachwissenschaft. 1931. S. 117.

14) W. Porzig: Das Wunder der Sprache 3. Aufl. 1962. S. 115.

15) Kräfte, Bd. II Sprachliche Gestaltung der Welt (以下単に Bd. II と略称) 3 Aufl. 1962. S. 380.

16) H. Glinz: Die innere Form des Deutschen, 3 Aufl. 1962. S. 41.

17) ibid. SS. 41-42.

18) F. de Saussure, Cours, p. 144.

19) W. v. Humboldt は Ergon/Energeia の対立した用語を得るまでにかかなりの苦心をしたと言われる。この点については、L. Weisgerber: Zum Energeia-Begriff in Humboldts Sprachbetrachtung (im „Wirkenden Worte“ 4. 1953/54. SS. 374-377) 及び H. Gipper, Bausteine zur Sprachinhaltforschung 1. Aufl. 1963. SS. 24-25 を参照。

問題は次のように立てられることになる。

1) 前掲 W. v. Humboldt の発言における Sprache を de Saussure の Langue と比べる場合、言語研究の主たる対象が上に規定された Langue であるとされる限りで、両者の言語観は永遠にまじわることのないものとなる。だとすれば、我々の前には、Humboldt か Saussure かという二者択一だけが横たわっていることになりそうである。Junggrammatiker 以来の Humboldt に対する誤解と軽視、ことに Saussure 以後のメカニストたちにおける Humboldt に対する過少評価の原因のひとつは、実にこの点にかかっていたものと言えよう²⁰⁾。

2) 前掲 W. v. Humboldt の Sprache を Saussure の Langage 又は Langue にひき当てることによって、Langage=Sprache als Energieia,

Langue=Sprache als Ergon

とみなすという解決法がある。この見解は、Sprache によって Langage と Langue との双方が表わされるとした Saussure 自身の発言とも一致するので、大いに妥当に見える。服部四郎教授も、Humboldt の Sprache がほぼ Langage に相当するものと考えておられるようである²¹⁾。O. Jespersen も Humboldt の言語観のなかに、Ergon としての言語と Energieia としての言語が区別できると考えているらしい²²⁾。L. Weisgerber は、言語研究一般において静態的方法と動態的(energetisch)方法との二を立て、前者は文法的なものであり、その任務は主として Sprache als Ergon の把握であるとし、一方で後者は真に言語学的観点であって、sprachliche Energieia の洞察を目的とするものであると言う²³⁾。また、H. Gipper は Sprache が「静態的一文法的視点と結びついた場合のみ、Ergon としてみなされるべきである²⁴⁾」と、きびしく方法的観点という制約を主張しているが、これは正論であろう。厳格に方法的観点としてのみ、Sprache als Ergon を承認するの でなければ、けだし Humboldt の Sprache を二分し、それぞれを de Saussure の Langage, Langue に引き当てることは、安易な折衷と修正にすぎぬというそしりをまぬがれないからである。

3) それ故、最後に、このような、いはば便宜的な解釈によって、第一に、はたして W. v. Humboldt の言語観が十分に汲みつくされ得るものであるか否か、第二に、de Saussure の、Langue を Langage マイナス Parole という《Schulexemplar²⁵⁾》を額面どおりに受け取って、Langue を Langage や Parole とは切り離された単なる「死んだ構成体」と理解するだけではたして十分であるか否か、という二点が究明されるべき問題となろう。第一の点については、上掲 H. Gipper のすこぶる厳格な限定が重要な意義をもってくるであろう。そしてこの問題の解決こそが、W. v. Humboldt の言語観と L. Weisgerber の言語理論の核心へせまるための正道である。第二の点については、我々はふたたび de Saussure の言語理論に立ちかえらなければならないが、そこでは、再び de Saussure の理論の豊か

20) W. v. Wartburg: Problematik und Methodik der Sprachwissenschaft. 2 Aufl. 1962. SS. 9-10 参照。

21) 服部四郎: 言語学の方法 1962. p. 173ff.

22) O. Jespersen: Mankind, Nation and the Individual 2 Ed. 1954. p. 19.

23) L. Weisgerber: Kräfte, Bd. II. S. 11.

24) H. Gipper, Bausteine zur Sprachinhaltsforschung 1. Aufl. 1963. S. 26.

25) F. de Saussure: Cours, p. 112.

な包摂力に驚嘆することになるであろう。

2.2. W. v. Humboldt の言語観の基底をなすものは、人間精神の「作用する力(wirkende kraft)」についての深い確信であった。ここから彼は、人間と言語とを統一的に把握しようとしたのであり、このことはつまり、言語行動をその全体としてとらえようとする強い志向が、Humboldt の言語観の核心であるとしてよいことを意味する²⁶⁾。Humboldt の矛盾の体系、すなわち言語の個人性と社会性、理性的なるものと感覺的なるもの、「内部形体 (innere Form)」と音声形体、言語と事物界などの対立は、Hegel に先がける Dialektik を我々の前にくりひろげるが、この矛盾の体系は、またすぐれて de Saussure の言語理論の先駆と言うべきであろう。それ故、Humboldt の言語観の理解は、この矛盾の体系を十分に把え得るか否かにかかっているともし過言ではないであろうし、このことは同様に Saussure 学全体の理解についても妥当するように思われる。

L. Weisgerber は、Humboldt の言語観の本質的特徴として、「言語の Weltansicht」と「内部形体 (innere Form)」の二を挙げている。この二つの観点は、L. Weisgerber だけではなく、E. Sapir²⁷⁾にも、またとくに Principes の時期の Hjelmslev²⁸⁾にも多大の影響を与えたものである。

1. Weltansicht の観点については、Humboldt は、「いくつかの言語があるというのは、ひとつの事物 (Sache) にそれだけ多くの表記があるということではない。そこには、それぞれの言語のさまざまな Ansichten があるのだ²⁹⁾」と語り、「それぞれの言語は、その個有の状況において、ひとつの Weltansicht の総体を形成するのであり、それはけだし、その言語が、語彙が世界から切り取って来たあらゆる表象のための表現、および世界を言語という姿において造り出すところのあらゆる感覺のための表現を含んでいるがためである³⁰⁾」とする。したがって、Humboldt にあっては、「言語の多様性はすなわち Weltansicht それ自身の多様性なのであり、ここにこそ、あらゆる言語研究のための根底と最終目標とがある³¹⁾」ことになる。こうして、Humboldt の Weltansicht という概念の射程は、きわめて大きなものと言わねばならないのであり、それはけだし、第一に、この概念をあらゆる言語研究の前面に立てることによって、言語による世界の造りかえ、つまり Das Umschaffen der Welt in das Eigentum des Geistes³²⁾ という思想が明確な姿をとって立ち現われるからである。Weisgerber は、この Weltansicht にかえて、Welt-bild なる用語を採用する。それは、Weltansicht という用語が Humboldt 自身も認めるように何かしら静態的な内容を含むが故に、たとえ静態的＝文法学的の観点に立って、「言語内容」の考察をおし進める場合においても、動態的の視点への転換を可能ならしめるにはいくらかの不都合をもたらさざるを得ないからであるという。他方、

26) H. Arens: Sprachwissenschaft 1. Aufl. 1955. S. 183ff.

27) Ed. Sapir: Language, 1949. 特に p.8 以降。

28) L. Hjelmslev: Principes de grammaire générale 1928. Weltansicht については特に Chap. IV 1-3 die innere Form については Chap. III. 1-2 を参照。

29) W. v. Humboldt, Ges. Schr. Bd. VII. 2 S. 602.

30) W. v. Humboldt, Ges. Schr. Bd. V. S. 433, Werke, 1963. Bd. III. S. 78.

31) W. v. Humboldt, Ges. Schr. Bd. IV. S. 27, Werke, 1963. Bd. III. SS. 19-20.

32) L. Weisgerber, Das Gesetz der Sprache, 1. Aufl. 1950. S. 26ff. 及びその他。

Welt-bild は、一方で bilden との聯想関係に立ち、他方では同時に Ansicht=Bild なる静態的視点をも与え得るので、静態的で、しかもなお動態性を内蔵するという利点をもっているという³³⁾。

第二に、Weltansicht の観点は Humboldt が Nation と呼んだ人間集団と言語との関係をきわ立ってはっきりと現出させる。L. Weisgerber の「母国語」と「言語共同体」の理論の原形がここに見られることは言うまでもない。Humboldt の Nation や Volk の概念についてはふれないにしても、Weltansicht という観点によって与えられた人間集団と言語との関係は、de Saussure の le consentement collectif, le corps sociale³⁴⁾ よりはるかに精緻であり、また、M. Cohen の言う une langue communes et nationales³⁵⁾ よりはっきりと限定された概念を要求するであろう。この要求に答えたものが、Weisgerber の「言語共同体」と、「母国語」との法則である。「言語共同体」は、その現象形体たる「母国語」と共に全一体を構成し、「内的に同一方向性 (Gerichtetheit) を有する行為のための自然的空間」であり、「母国語の歴史的な力の作用圏」であり、何よりも「同一母国語の作用によって存立する人間集団」として、集団の成員にとっては自明であるがために、かえって往々にして意識されることなく、しかも個人に外在する「共通の母国語的世界像」の担い手であると規定される³⁶⁾。こうした「母国語」と「言語共同体」との内容とその機能を確認するに加えて、Weisgerber は更に人類が、空間的・時間的に「すきまなく (lückenlos)」「言語共同体」に組み込まれているという普遍的な事実から、「言語共同体の普遍的法則」=「母国語的人類法則」³⁷⁾ を定立しようとする。

第三に、Humboldt が事物 (Sache) と Weltansicht とを峻別したことの結果は、きわめて実り多いものである。なぜなら、このことによって、本質的に動態的な「内部言語形体」の問題への接合点が与えられると共に、本稿で問題とする「言語的中間世界」(sprachliche Zwischenwelt) のための理論的系譜がそこに見出されるからである。

2. 「内部言語形体」の問題については、Humboldt は次のように言う；「言語は、相互理解のための単なる表現手段ではない。それは、精神がみづからの力の内的活動によって自己と対象との間に据えなければならぬ真の世界なのである」³⁸⁾。したがって、言語は「永遠に繰り返される精神の動き」³⁹⁾であり、生活世界を「精神の所有物へと造りかえる (umschaffen) ところのもの」⁴⁰⁾にほかならない。こうした言語の本質的理解に立つとき、言語研究の本来の課題は次の任務を第一義的なものとする。すなわち、「言語比較の経験的研究は、人間が言語をどのような仕方で成立させるのか、また、人間にとって言語のなかに入り込むことのできるのは、

33) L. Weisgerber, Die vier Stufen in der Erforschung der Sprachen, 1. Aufl, 1963 S. 95及び H. Gipper: Bausteine zur Sprachinhaltsforschung S. 37 参照。

34) F. de Saussure: Cours, p. 37 et p. 25.

35) M. Cohen: Pour une Sociologie du Langage 1959 pp. 308-309.

36) L. Weisgerber: Das Menschheitsgesetz der Sprache, 2 Aufl. 1964, S. 120ff. Das Gesetz der Sprache, 1 Aufl. S. 102ff. 及びその他。

37) Menschheitsgesetz という概念は、ことに 1962-63年以降力説されている。

38) W. v. Humboldt: Ges. Schr. Bd. VII. S. 176. Werke, 1963. Bd. III. S. 567.

39) ibid. S. 46. Werke, 1963. Bd. III. S. 418.

40) ders. Bd. IV. S. 420. Werke, 1963. Bd. III. S. 64.

思考世界のいったいどの部分なのかを研究することである。」⁴¹⁾と。

このような基本的な立場からとらえた「内部言語形体」は、いまひとつの重要な思想、すなわち「音声形体と内部言語法則との結合が言語（複数）の完成体を形成する」⁴²⁾という発言と関聯させて見るならば、Humboldt の言う、この「内部言語形体」という概念は、A. Marty⁴³⁾ や O. Funke⁴⁴⁾ の「内部言語形体」とは殆んど関係をもたぬほどの、非常に遠い射程をもつ、言語一般に本質的なものであることが理解されよう。それはむしろ、L. Hjelmslev の système concrète に近く⁴⁵⁾、H. Glinz の言うように「多少なりとも通用する（つまり、言語的価値を体现する）構造的特徴の総体」⁴⁶⁾と考えられるべきものであろう。それ故、W. Porzig が、「内部言語形体」の概念について、それは「1° 言語の諸現象に統一を与えるべきものであり……ここでは言語に内在するところの原理が問題となっている。2° 一方、内部言語形体の概念は、客観的な精神的作品 (objektives Geisteserzeugnis) としての言語が他の同種の作品、例えば芸術や宗教などとのどのような関係にあるかを明示する」⁴⁷⁾と云うのは、たしかに当を得たものである。

Humboldt の「内部言語形体」にたいして、試みに de Saussure の用語によって解釈をほどこすならば、それは、「具体的実在体 (entité concrète)」と「抽象的実在体 (entité abstraite)」の総体として与えられるところの système de signes (=Langue)⁴⁸⁾ を、その体系内部における諸単位の言語的価値 (valeur linguistique) の観点から見直し、更に、Langue が「二つの無定形のマスの中で構成されながら、みづからの単位を精製してゆく」⁴⁹⁾というきわめて重要な思索、すなわち、Langue 形式の過程における Energeia 的思想——Langue 論において往々にして見のがされがちであった重要な論点であるが——によって裏うちしたものにほかならない。もともと、de Saussure は Langue の学を方法的観点から定立したのであるから⁵⁰⁾ Langue 研究の本来の領域が、音的秩序と「思想」の秩序とに属する二要素が結合するところの場、つまり de Saussure が

La linguistique travaille donc le terrain limitrophe où les éléments des deux ordres se combinent: cette combinaison produit une forme, non une substance.⁵¹⁾

と語る領域にほかならぬという思想は、しばしばその動態的性格を去勢されがちではあったが

41) ibid. S.9. Werke, 1963. Bd. III. S.7.

42) ders. Bd. VII. S. 95 Werke, 1963, Bd. III. S.473 下線筆者、註95)を参照。

43) A. Marty: Untersuchungen zur Grundlegungen der allgemeinen Grammatik und Sprachphilosophie, 1908, Bd. I。

44) O. Funke: Die innere Sprachform, 1924. 特に S.111ff.

45) L. Hjelmslev: Principes de grammaire générale, 1928 chap. IV § 52参照。

46) H. Glinz: Die innere Form des Deutschen, 2 Aufl. 1963 S.8 但 () 内は筆者。

47) W. Porzig: Der Begriff der inneren Sprachform (in "Indogermanischer Forschung,, Bd. 4. 1923. S.164.

48) F. de Saussure: Cours, p.32, p.33 et p.144.

49) ibid. p.159 (que la langue èlabore ses unités en sa constituent entre deux amorphes) ここで deux amorphes は音的及び観念的な二つの無定形のマスのことである。Cours. p.156 の図を参照。

50) もとより Langue の学が単に方法的視角にすぎぬという矮小化は許されない。いた、それがたえず「言語の生」との関係で思考と理論の展開における非生産的なずれを正して行かなければならぬと言うまでである。

51) F. de Saussure: Cours, p.157.

本稿の主題である「言語的中间世界」に関して、正しい立脚点を与える土台となるに止まらず、言語学一般を「極端なメカニズム」から救う道標となるが故に、然るべき評価を受けるべきものと言わねばならない。

2.3. 概略以上のような「内部言語形体」の理解からして L. Weisgerler が自己の理論体系のなかにとり入れ、更にそれを発展させたものは、一言にして言えば、de Saussure の基本的には静態的な Langue の学と W. v. Humboldt によって与えられた energetesch な観点との結合である。だが人は、あるいはこうした「結合」にむしろ Saussure 学の破壊を見るかも知れぬ。しかし、de Saussure が Langue の学をもって言語研究の第一の規範としたのは、「Langage が混質的 (hétérogène) である」に対して、Langue が等質的 (homogène) であり、それ故に「Langage をいちどきに数面から研究するならば、言語学の対象は相互に何の連絡もない異質物の寄せ集め (un amas confus des choses hétéroclites) となるであろうから、まづもって方法的に Langue の領域に腰をすえ、それを「Langage の爾余一切の顕現の規範 (norme de tout les autres manifestations du langage) とする⁵³⁾」ことが方法的に必要であったからにほかならない。また、Langue はもともと Langage の単位をなすものであるから、「Langue に対して Langage 研究における第一の位置を与える」⁵⁴⁾ べきであるとも言われている。こうした発言にてらして、最も我々の注意をひくのは、Langage の顕現 (manifestation) の規範としての Langue という思想である。この場合、規範とは、社会習慣の特徴と、したがってその制約との総体と解すべきものであるのはもちろんである。これに加えて、のちに言語場の理論として展開されるに至った opposition の概念⁵⁵⁾にふれて、「Langue のメカニズムはつまり……この類の opposition と、これが包摂する音的差異に基づくのである」⁵⁶⁾ と言うのは、ひっきょう、Langue が substance ではなく、forme として形成される過程のメカニズムを語ろうとしたものと考えてよいであろう。この Langue 形成のメカニズムについては、ことに言語的価値に関して⁵⁷⁾、恣意性とその制限における精神の介入に関して⁵⁸⁾ 述べた個処など、随所で論及されているのであるが、こうした点を考慮するならば、de Saussure の脳裡にあった Langue は、まづもって、「社会化された parole」の総体、つまり Langage (これは動態的な実在であるが) を不断に、且つ十分に配慮しつつ研究されるべきものであったと考えてよいであろう。けだし Langage なくして Langue なく、Langue なくして、Langage は成立しないのであるから。第二に、体系としての Langue はそれ自身を形成するところのものが、ほかならず Langage そのもののメカニズム、あるいは

52) ここで「私自身は……『メカニスティックなメンタリスト』と呼ばれることを欲する」と言われた服部四郎教授のことばを想起したい。(言語学の方法 p.168.)

53) F. de Saussure: Cours, p. 32, p. 32, p. 140.

54) F. de Saussure: Cours, p. 27 (Pour attribuer à la langue la première place dans l'étude du langage.) 下線筆者。

55) de Saussure は、残念ながら思想史一般、ことに理論物理学における場の理論の確立 (1919-26) を見ずに他界した (1913)。筆者は、de Saussure の opposition 概念に場の理論の本質的モメントを見る。

56) F. de Saussure: Cours, p. 167.

57) ibid. p. 155ff.

58) ibid. pp. 182-183.

Dynamik なのであるから、既成体系としての Langue を正しく理解するためには、少くとも原理的には、その形式のメカニズムの考察を Langue 研究の本質的領域としなければならない。更に一步を進めるならば、体系としての Langue の学の延長線上には、Langage の学が立っていることを、de Saussure と共に我々は、はるか望むことができるのである⁵⁹⁾。

2.4. 以上のような理論的系譜の探索は、「言語的中间世界」の概念と、それを中心的概念とする Weisgerber の理論体系全体が、現代の言語理論のなかで、いかに 重要な位置を占めるのかを明らかにするために、最少限必要な手続きであった。すなわち、我々は Saussure 学を基盤としてこそ、L. Weisgerber の最も重要な思想、「母国語の实在 (Wirklichkeit einer Muttersprache)」にふれ得るのであり、この「母国語の实在」とは、上述のように、Humboldt 的に energetisch な言語観をもってとらえた《les entités de la langue》の総体と考えてよからうと思う。この場合、Langue は、服部四郎教授に従って⁶⁰⁾、「社会習慣の特徴の総体」をもって Langue 的特徴とみなさねばならぬ。だが、Weisgerber の「言語共同体」というカテゴリーは、いわゆる「社会習慣的」、あるいは「社会的」なそれよりも、厳密であるように思われる。詳細については、稿を改める所存であるが、結論的に言って、Weisgerber の「言語共同体」は、de Saussure の institution sociale⁶¹⁾ に比定することもできようが、それはむしろ M. Cohen の terrain linguistique⁶²⁾ により近く、音的、内容的な Sprachzugriffe⁶³⁾ の同一性にもとづくところの人間集団であるとしてよからう。Weisgerber の「言語共同体」が大略このようなものであるとすれば、氏の「母国語」とは、つまり「社会学的領域において、ある言語共同体と相互関係にあるところの言語の形体」⁶⁴⁾ であることになる。すなわち、共時論的平面における言語を更に言語共同体とその成員の総体との生きた相互関係においてとらえた实在なのである。かくして、「母国語」は、形体的=感覺的にして同時に内容的=心的な实在体 (entité), つまり言語記号の体系として顕現する。換言すると、de Saussure の用語では、「具体的实在体 (entité concrete)」と「抽象的实在体 (entité abstraite)」との体系として、流動的な言語行動の場からは切り離された Sprach als Ergon の姿態をとって我々の前に立ち現われるのである。それ故 Weisgerber の「母国語」は、de Saussure の Langue と同様にひとつの réalité sociale⁶⁵⁾ である。そして、その实在性の様式を一層厳密に規定するならば、それは、Dinglich-Reales でもなく、Nur-Gedachte-Abstraktion でもない。これらに並ぶいまひとつの Existenz, 例えば文化的構成体 (Kulturgebilde) の如き实在 (Wirklichkeit) である⁶⁶⁾。

59) ibid. p. 24 参照。

60) 服部四郎: 言語学の方法 : p. 181.

61) F. de Saussure: Cours, p. 107.

62) M. Cohen: Pour une Sociologie du Langage 1959 p. 312.

63) L. Weisgerber: Das Menschheitsgesetz der Sprache 2. Aufl. 1964 及び特に Die Erforschung der Sprach„zugriffe“ I (im Sammelband des „Wirkenden Wortes“, Bd. I, Aufl. 1, 1862) 以後の論究は、この解明を中心に課題として来たようである。

64) L. Weisgerber: Das Menschheitsgesetz der Sprache 1. Aufl. S. 30.

65) F. de Saussure: Cours. p. 32, p. 112 et 173.

66) L. Weisgerber: Das Menschheitsgesetz der Sprache S. 31. Kräfte, Bd. I. S34ff., Die vier Stufen der Erforschung der Sprachen 1. Auf. 1963. S. 24ff. u. S. 105ff.

この場合、Weisgerber の言う実在 (Wirklichkeit) は氏の理論体系のなかで、「言語の力 (Sprachkraft)」, 「世界 (Welt)」と並んで重要な概念であることを知らねばならない。Weisgerber は、E. Rothacker が提起した Welt:Wirklichkeit の対立⁶⁷⁾に論及して、これを「内的世界 (Innenwelt)」と「外的世界 (Aussenwelt)」との対立と見なしてはならず、むしろ、「人間外的領域はそれ自身で Wirklichkeit の性格を有し、それが人間の把握力 (Zugriffe) が到達し得る限りで (生きた人間的) Welt の要素となる。そして、後者、つまり不断に移転するこの領域は、Wirklichkeit とも、Welt とも理解できるものである。人間内的なるものは他方、Wirklichkeit にも関与しているのであり、それが生きた人間の世界の意識 (Bewusstheit) のなかに入り込む範囲で、Welt に属するものである」⁶⁸⁾とする。したがって、Wirklichkeit は、人間の精神的活動がそれをとらえ得るところの Seiendes であり、一方で、人間の Bewusst-Sein から切りはなされたものと考えられる限りで、Sein であるということになる。要するに、Weisgerber が「母国語の Wirklichkeit」と言うとき、この Wirklichkeit とは、その本来の座が人間内的世界にあっても、また人間外的世界にあっても言語的把握 (Sprachzugriffe) の対象となり得るもの、及びその結果得られたところの《entité psychique》である。こうして、かような意味での Wirklichkeit は、人間の精神活動が把握し得る対象という観点からすれば、静態的な réalité であり、他面、Welt ↔ Wirklichkeit の相互推移の可能性と、従って、それが言語把握 (Sprachzugriffe) の対象であると同時に結果でもあるという観点からすれば、再び、energetisch な概念であることになる。

従って、このように理解された「母国語」は、Energieia としての言語の実現様式であり、それ故に、再び Humboldt の Weltansicht にほとんど一致する。言いかえれば、Saussure の理論と、Humboldt の省察から得られた、言語社会学的、及び一般言語学的なひとつの単位であるとなされるのである。ここから、例えば、「日本語」と「日本人の母国語」という用語の相異が、言語理解の本質的相違を担ってくるという Weisgerber の発言の意味が納得されてくる。すなわち、前者は「死んだ構成体」として、後者は、Energieia の展開形体として言語を理解したことを意味するのである。L. Weisgerber は、Das Gesetz der Sprache Aufl. I. 1950年を1963年夏全面的改訂するに際して⁶⁹⁾、新たに「母国語」の概念を規定して、次のように語っている：

Muttersprache als gemeinsame Entfaltungsform der Sprachkraft einer Menschengruppe……

Das Grundphänomen, um das es geht, besteht darin, dass eine Gruppe von Menschen sprachlich so behandelt, dass die Sprachkraft, die jedes einzelne Mitglied als Mensch mitbringt, sich in einer spezifischen Gemeinschaftsform entfaltet. Diese dauerhafte gemeinsame Entfaltung von Sprachkraft konstituiert die Muttersprache.⁷⁰⁾

「母国語」が、このように Sprachkraft の展開形体というかたちで動態的観点を内包したものと規定されるためには、上述の言語外的な Wirklichkeit に対する言語的把握 (Sprachzugriffe) の Dynamik が見出されていらくてはならなかった。そのための準備作業は、1955年

67) L. Weisgerber: Kräfte, Bd. II. SS. 248-250.

68) ibid. S. 250.

69) L. Weisgerber: Das Menschheitsgesetz der Sprache, 1. Aufl. 1964.

70) ibid. S. 32.

から1960年にかけての諸論文⁷¹⁾によって遂行され、1962年刊の Vom Weltbild der deutschen Sprache 中の第二巻、すなわち Von den Kräften der deutschen Sprache, Bd. II では、das Worten der Welt の過程に關与する三大要素として、Sprachkraft, Welt, Wirklichkeit が挙げられている⁷²⁾。Sprachzugriffe の源泉として、かような Sprachkraft を「仮説」することに、Weisgerber の理論のひとつの弱さが見られるという批判はけだし正当なものである。言語学が科学として成立するために、このような何かしら神秘的にすぎる觀念に、それが基づいてはならぬのは言うまでもない。だが、Weisgerber の Sprachkraft の「仮説」は、第一に、あくまで、經驗的、帰納的な手順によって得られたものであることに留意しなければならぬ。この手順と概念のつみ上げが、Weisgerber のいわゆる Metalinguistik を、その神秘性から、すなわち、極度のメンタリズムから解放しているのである。第二に、一般に人間の Sprachbegabung, つまり、Herder の言う menschliche Besonnenheit⁷³⁾ の天分、あるいは、H. Gipper が de Saussure の Langue に比定さえしている Sprachfähigkeit⁷³⁾ を「仮定」せずして、誰か言語一般について語り得ようか。Sprachkraft の「仮説」は現在の諸科学の発達段階においては、この意味では、かつて、エーテルがそうであったような作業仮説にはかならないと言えよう。だがそれは、あくまで、Weisgerber の行ったような經驗的・帰納的な手順によるものでなければならぬ。そして、こうした意味での Sprachkraft をたとえ「仮説」としてでもひとたび承認するならば、それは、我々の言語生活の構造と形成における本源的な契機として認めなければならなくなる。Weisgerber の Das Gesetz der Sprache の第二版、Das Menschheitsgesetz der Sprache, (1964) は、この本源的契機を土台として、理論の体系の再構成を試みたものと思われるが、その記述を非 Saussure 的な「墮落」から救っているのは、Weisgerber が、この本源的契機の「仮説」の作用をもって、言語研究の出発点とも終結点ともみなしているがためである。けだし、この「仮説」の肯定が必然的に「母国語」を人間の言語生活一般における「作用する力 (Wirkende Kraft)」として承認することを強要するからである。ここでふたたび Humboldt の「言語はつまり永遠にくりかえされる精神の活動 (Arbeit) である」⁷⁴⁾ という思想が蘇るのである。このように、Weisgerber においては、「母国語」こそが言語的価値の体系という Wirklichkeit であり、人間の言語・文化・歴史生活をつらぬく「作用する力」であると規定される。そして、その存在様式は、あくまで言語共同体的に限定され、基本的には個人に外在する「言語の力の展開形体 (Entfaltungform der Sprachkraft)」なのである。

71) 特に次のものが重要である。

Das Worten der Welt als sprachliche Aufgabe der Menschheit. Sprachforum 1. 1955.

Der Begriff des Wortens. Corolla linguistica. Festschrift F. Sommer, 1955.

Die Erforschung der Sprach „zugriffe“ I. Wirkendes Wort VII. 1956.

Die Gerichtetheit der Sprachzugriffe. Konkrete Vernunft, Festschrift E. Rothacker, 1958.

Die vier Schauplätze des Wortens der Welt. Festschrift Th. Litt. 1960.

Die ganzheitliche Behandlung eines Satzbauplanes, Beiheft zum “Wirkenden Wort” 1. 1962など。

72) L. Weisgerber: Kräfte, Bd. II. S. 251ff.

73) 注目すべきことに、H. Gipper は de Saussure の Langue に、この (Sprachfähigkeit) を当てている。(H. Gipper: Bausteine zur Sprachin*altsforschung, 1963, S. 22 u. S. 25)

74) W. v. Humboldt: Ges. Schr. Bd. VII. S. 46, Werke, 1963. Bd. III. S. 418.

2.5. さて、我々は、L. Weisgerber の「言語的・中間世界」という概念の位置と構造と形成過程を理解し、とりわけ、この概念を Saussure 学の立場から把握するために、Weisgerber の全理論体系の容姿を概観しておかなければならない。周知のように、科学の方法は第一に、その対象の性質によって決定される。言語学が何らかの意味での「母国語」（単数でも、複数でも）を取扱う学であるとするれば、その方法は、「母国語」という《die Entfaltungsform (-en) der menschlichen Sprachkraft》の諸相へのアプローチの仕方が、その全てではないにしても最も基本的な視点となるであろう。L. Weisgerber は、こうした原理的な地点に立って言語研究の正しい方法を新たに提起しようと試みている。Weisgerber に従って、語彙に関するものから平易な一例を挙げるならば、いかなる語といえども：

- a. 音声的・感覚的な側面、すなわち Gestalt⁷⁵⁾ の側から、音素論的・形体音素論的研究を中軸として考察される。
- b. 精神的・概念的・内容の側面、すなわち Inhalt の側から、言語内容の言語場の規定を中軸とする、いわゆる inhaltbezogene Grammatik の中心課題として考察される。
- c. 第三に、それは、たとえ小世界であろうとひとつの世界を我々の脳裡に形成し、事物界と精神内部の世界との媒体としての機能 (Leistung) をもっている。人間の言語行動におけるこの語の機能の観点からの考察がここでは前面に立ちあらわれる。
- d. 最後に、この語は、我々の脳裡の小世界として、人間の言語生活全般に対して、換言すれば、歴史的・文化的生活の全域に何らかの「作用」を有するであろう。この人間の言語生活全般における Wirkung の研究は、言語学一般の最後の課題なのである。

L. Weisgerber は、これら、Gestalt, Inhalt, Leistung, Wirkung のそれぞれの手がかりにしたがって、言語研究的方法的な階梯を四大別し、それぞれ、gestaltbezogene Grammatik, inhaltbezogene Grammatik, leistungbezogene Sprachwissenschaft, wirkungbezogene Sprachwissenschaft とする。これらのうち前二者は、真の言語研究のための予備作業であり、また、いづれの階梯も、単独では、真の言語学とはなり得ないとされている⁷⁶⁾。なぜなら、それらは、それぞれ言語一般に対するさまざまな観察研究の観点を成すにすぎず、したがって全体としてはじめて言語学を形成し得る研究の構成分野なのであり、それ故、各分野、又は階梯を、それぞれ自己目的とすることは、厳にいましめられるべきものである。

gestaltbezogen な言語研究の本来の目的は、Weisgerber によると、母国語の特徴を体現する音声的・感覚的記号と、その体系を意識化することであるという⁷⁷⁾。この観点が爾余の諸階梯に先がけるのは、言語記号が言語において直接、つまり感覚的にとらえ得る唯一のものであるためである。もちろんこの場合、言語記号における音声的・感覚的なものが、音響学的あるいは狭い意味での音声学的カテゴリーに在るのではなく de Saussure にしたがって、それは、決して matérielle なものではなく、concept (=signifié) と相互浸透関係に立つ image acoustique (=signifiant) として、心的実在体 (entité psychique) のカテゴリーに座をし

75) L. Weisgerber は、1963年以降 lautbezogen を gestaltbezogen に改めている。その理由については特に Die vier Stufen, S. 15 を参照。また、Gestalt に筆者は「型態」なる訳語を、また、Form には「形体」をあててみた。

76) ことに Das Menschheitsgesetz, S. 52ff., Die vier Stufen 1. Aufl. Teil I, II, III. を参照。

77) L. Weisgerber: Die vier Stufen, 1. Aufl. S. 40ff.

めるものであることは言うまでもない⁷⁸⁾。L. Weisgerber は、言語記号をほぼ次のように理解しているのであるが；

Unter Sprachzeichen versteht man die sinnliche Elemente, die in in einer Sprache als „Träger“ sprachlicher Inhalte Geltung besitzen …… Aus ihr (der Wiederbelebung der Philosophie des Zeichens, vor allem E. Cassierers) entspringt die Folgerung, dass mit den Sprachzeichen auch die Sprachinhalte stehen und fallen, dass die Sprachmittel also sinnlich-geistige Ganzheiten sind, die in ihren beiden Seiten sprachlichen Charakter haben. Lautung allein ist noch nicht Sprache, sondern erst das ‚bedeutsame Lautzeichen‘, im Grunde der an eine sinnliche Gestalt gebundene geistige Zugriff, kann als Sprachelement anerkannt werden.⁷⁹⁾

氏の *gestaltbezogen* な研究とは、つまり、このように規定された言語記号とその音声的、感覚的側面に関する学である。Weisgerber が言語記号の音声的・感覚的側面をこのようなものとして理解したことの意義は、第一に de Saussure の記号論における *signifiant—signifié* の結合の不可分な緊密性を再確認し、同時に、*energetisch* な視点から言語的把握 (*Sprachzugriffe*) という人間精神の *wirkende Kraft* の発現によって、*Sprachkraft* が *Lautung* をとらえる際のメカニズムを示した点である。第二に、こうした記号論は、音素論と形体音素論とを「母国語」の観点から再評価し、音素決定に際しての弁別の特徴を「母国語的」なるものの枠内に限定し、逆に——一見無益な循環論法に見えるかも知れないが——母国語的 *Lautung* の特徴を、この弁別の特徴の言語場での相互対立の総体によって規定するというこの分野での新たな視点の確立を求めているのである⁸⁰⁾。第三に、L. Weisgerber は、*Die vier Stufen in der Erforschung der sprache* (1963) 以後、以前に使っていた、*formbezogen, lautbezogen* という用語を *gestaltbezogen* に改めたが⁸¹⁾、これは、H. Brinkmann の提議によるものだと言う⁸²⁾。改善の理由は、第一に、*Iahalt, Leistung, Wirkung* などの比較的大きなカテゴリーに対応させるには、比較的狭い *Laut* が不適當であるというにとどまらず、第二に、一層積極的な立場から、「狭義の *Laut* に加えて、アクセント条件、すなわち、リズム・メロデーの要素、更に話線の継起から得られる指示 (語順・間) などをこれに含めることもできるためである。」⁸³⁾ それ故この用語問題は重要な意義をもっていると言わなければならない。

このように *gestaltbezogen* な階梯は言語の型態 (*Gestalt*) を規準、あるいは結節点とする視点であり、その上に立つ言語研究の諸階梯のための、必須不可欠な前提なのである。言い換えれば、ここでは、型態の側面から、言語内容と機能、作用の研究へと研究が進められるのであるが、これに反して、Weisgerber が、次の、本質的言語研究としている *inhaltbezogen* な観点は、型態からのアプローチを必須であるが、単に予備的作業に過ぎない手順とみなすことから出発する。*inhaltbezogen* な研究は、かくして、「自立的な言語内容の研究」にほかな

78) F. de Saussure: *Cours*, p. 98.

79) L. Weisgerber: *Die vier Stufen* S. 39. *Sprachzugriffe* については稿を改める所存である。

80) N. S. Trubetzkoy には、この方向で解釈できそうに思える発言が見られる。(Grundzüge der Phonologie, 3 Aufl. 1962. S. 38ff)。また W. F. Twaddell の、Bloomfield, Jones 批判は、「母国語的特徴」を作業原理とすることによって、非常に理解しやすいものとなる。(W. F. Twaddell: *On Defining the Phoneme*, in *Readings in Linguistics*, ed. by M. Joos, 1956) 及び、服部四郎:「音韻論と正書法」(昭26) p. 4以下。

81) L. Weisgerber: *Die vier Stufen*, 1. Aufl. S. 41.

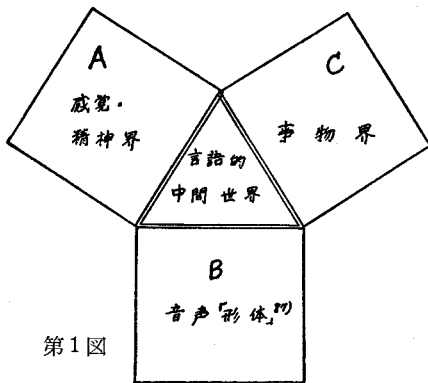
82) *ibid.* S. 14, u. S. 41ff. また、J. Erben: *Arbiss der deutschen Grammatik*, 4. Auf. S. 21 u. S. 172ff. を参照。

らない。こうした立場は、だが、決して、L. Weisgerber によって創始されたのではない。それは、前述のように、W. v. Humboldt の「内部言語形体」論を祖とし、de Saussure の association 論、opposition 論、言語価値に関する理論⁸³などにもとづき、かつ、J. Trier の言語場の理論⁸⁴によって裏うちされたものである。Weisgerber の inhaltbezogene Grammatik⁸⁵の第一の功績は、人間外的にして且つ言語外的なるもの、つまり das Sachlich-Dingliche と、人間内的にして、且つ言語外的なるもの、つまり、L. Hjelmslev の言う Mening (英訳: purport)⁸⁶と、言語的なるものの三要因を峻別したことである。このことは同時に、往々にして行なわれた de Saussure の concept (=signifié) を、純粹に観念的な idée、心理学のカテゴリーたる「表象」などとする謬見を排するに大に功あったのである。第二に、この同じ区分規定は、言語記号が「事物の表記である」とする「音声形体」——事物間の直接的・無媒介的結合を主張するところの、いわゆる Bezeichnungs-theorie を打破し得た事である。換言すれば、「音声形体」⁸⁷と人間外的にして言語外的な事物の世界との間に、いまひとつの世界が存在することが見出されたのである。この第三の世界が「言語的中間世界」であって、それが、言語理論一般にとってどれ程重要な概念であるかは、その位置が、第1図で示すように、言語の本質的問題の中核に在ることからも明瞭である。それは、

- a. 共に言語外的な、人間内世界、人間外世界の中間に立ち、
- b. 音声形体と事物界との中間に立つ。

それ故「言語的中間世界」の位置は、二重の三元論の中位を占めているのである。Inhaltbezogene Grammatik 論の他の功績のひとつは、J. Trier⁸⁸によって、はじめて明確なかたち

を得ることができた言語学における場の理論を一層精緻なものに仕上げ、これを言語内容の規定のための本質的手順として確定した点である。



- (A) は L. Hjelmslev の用語では content-purport に
- (B) は同じく、expression-purport に相当する。
- (C) は、L. Weisgerber の用語で、Sachwelt である。
- (A), (B), (C) いずれも言語外的なカテゴリーである。

83) F. de Saussure: Cours, pp. 170-175 et p. 155ff.

84) J. Trier: Der deutsche Wortschatz im Sinnbezirk des Verstandes, 1931, 及び Das sprachliche Feld. Neue Jahrbücher f. Wiss. u. Jugendbild. 10. 1934. SS. 428-449.

85) 最初に、この名を冠した書物は Vom Weltbild der deutschen Sprache の 2. Aufl. (1953), I. Halbband であった。これは、3版以後 Von den Kräften der deutschen Sprache の Bd. I. Grundzüge der inhaltbezogenen Grammatik とされている。

86) L. Hjelmslev: Omkring sproget og sprogteoriens grundlæggelse 1943, 英訳 (F. J. Whitfield) Prolegomena to a Theory of Language 1961. p. 69. この purport の原語は Mening であり H. Arens 訳ドイツ語では Gedanke, Sinn とされている (H. Arens: Sprachwissenschaft, 1. Aufl. SS. 517-8).

87) この「音声形体」は、未だ concept との相互浸透関係にない言語外的範疇であろう。

88) J. Trier, L. Weisgerber 更に St. Ullmann による言語場の理論の展開については別に論及する心算である。

leistungbezogen な、及び wirkungsbezogen な階梯においては、W, v. Humboldt 的な energetisch な思想が前景にあらわれる。この階梯での中心概念は、「言語的中間世界」にかわって、「世界のことば化 (das Worten⁸⁹⁾ der Welt)」という動態的概念があらわれる。また、「言語内容」にかわって、「言語把握 (Sprachzugriff)」の概念が主要なものになる。研究のプログラムもまた、「母国語的世界像 (muttersprachliche Weltbild)」の記述から、「母国語的世界形成 (muttersprachliche Gestaltung der Welt)」の探究へとその歩みをすすめることになる。L. Weisgerber は次のように言う：

Und da eine Muttersprache gemeinschaftliche Entfaltung von Sprachkraft ist, so sind die Leistungen und Wirkungen dieser Sprachkraft Anfang und Ziel der Sprachbetrachtung. Zum Erforschen dieser Leistungen fehlten zunächst alle Handhaben. Nachdem aber nun die grammatische Arbeit mit ihren Methoden Sprache bewusst gemacht hat, ist die Lage wesentlich gebessert: Im Wissen über die Sprache können wir nun wieder an die Untersuchung der Entfaltung der Sprachkraft herangehen. Energetische Sprach-betrachtung wird aussichtsreich in ihren beiden Formen der leistungbezogenen und wirkungbezogenen Sprachwissenschaft.⁹⁰⁾

ここで、leistungbezogen な研究が中心的課題となり、この課題の遂行のはてに、人間の「生」における言語の作用 (Wirkungen) の研究が立っているのだと言う。

Wirkungbezogen な研究階梯では、全的な人間の言語生活の場が問題となると言うのであるが、それが主として、共同体的・文化的生活の構成における言語の作用⁹¹⁾、言語の通用の様相⁹²⁾ についての研究であるとすれば、いわゆる、応用言語学の分野に属するものであるのか、あるいは、Saussure の用語に従えば Parole の学に属するものであるのか、また、文体論的カテゴリーであるのかは不明である。それは少なくとも、本稿最初に掲げた H. Glinz の理解するような、Langage のメカニズムの研究という領域を含みつつ、その上に、文体論的な応用言語学的な志向をもったものであるに相違ない。筆者は、Weisgerber が Wirkungbezogene Sprachwissenschaft の研究領域をいまだ十分には、明白に限定できていないのではないかと考える⁹³⁾。

さて、我々は「言語的中間世界」の概念が L. Weisgerber の理論体系全体のなかで、いかなる位置を占めるかについて、概観することができた。ここで、氏の理論体系を、概略的に図式化し (第1図)、「言語的中間世界」の位置を確認してみよう。かくして、「言語的中間世界」が、Sprache als Ergon (これは、de Saussure の Langue にほとんど一致する) の把握をその目的とする静態的・文法的研究のなかで、主要概念をなすものであることが明瞭になる。それは、動態的、energetisch な研究階梯における「世界のことば化 (das Worten der Welt)」という概念の対部として、言語記号論の本質にふれるものである。

89) das Worten なる用語は、1955年以後 Weisgerber が使用したものであるが、H. Gipper によると、かつて、Meister Eckehart が使用したと言うが(H. Gipper: Bausteine. S. 44), L. Weisgerber の Kräfte. Bd. II. S. 255ff. で定義されたように、厳格な概念としては、L. Weisgerber 独特のものであるとしてよからう。

90) L. Weisgerber: Die vier Stufen, S. 93.

91) bid. S. 124ff.

92) ders. Das Menschheitsgesetz der Sprache, 2. Aufl. 1964. S. 88ff.

93) 倉石五郎先生のお話しによると、L. Weisgerber氏自身、自分の理論体系における最も脆弱な点はこの、wirkungbezogene Sprachwiss. の不明確さだという趣旨のことを言っておられるそうである。今後の理論的展開は、この部分を中心に行われて行くことと思われる。

言 語 研 究 の 全 域		
研究 方法	文 法 学 的	言 語 学 的
研究 様 式	静態的観察を主とする	動態的 (energetisch) 観察による
研究 視 点	gestaltbezogen : inhaltbezogen	leistungbezogen : wirkungbezogen
研究 目 標	Ergon としての言語の把握	Energieia としての言語の洞察
研究 プログラム	母国語的世界像の記述	母国語的世界形成の探究
その性格	構造法則の発見	形成過程の探究
その手順	型態音素論的 内容構造の規定	言語の力の展開形体研究, 人間の「生」との関係
その主要概念	言語的中間世界	世界のことば化
その根本概念	言語内容	言語把握
その研究手順 1	母国語的特徴の記述: 場の法則の適用	内部言語形体の形成過程の機能, 作用
同 2	言語内容規定性の確定	把握 (Zugriff) の方向性の確認
記号学的研究手順	言語記号体系の構造・形式原理	言語記号体系の形成過程と作用原理

3. 「精神的中間世界」の仮説

3.1. 「精神的中間世界 (geistige Zwischenwelt)」の概念の導入と, その位置について考察をすすめるとき, 我々は, ふたたび W. v. Humboldt から始めることができる。Humboldt は, 彼の最後の著 Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts(1836) のなかで, 次のように書き残している:「言語のなかには, ……二つの構成原理が区別できる。すなわち, 内部的言語意義 (der innere Sprachsin) (私はこの語を, ある種の特殊な力としてではなく, 言語の形成と使用に関係する精神的能力の総体, つまり専ら, ある視準 (Richtung) と理解しているのであるが) と音声とがそれである。ただし, 音声は器官の特性に依存し, 既に継承されたところのものに基いている限りにおいて。内部的言語意義は, 言語を内部から支配し, いたるところで指導的衝動を与える原理である。音声は, それ自体としては, 形体を受けとめる, 受動的な資料に擬してよからうと思う。つまり, それは, 言語意義によって浸潤せられ, 分節されたものに転化され, 従って, 不可分の統合単位として, 絶えざる相互関聯の作用のなかで知的にして感覚的な力を内包する場合にのみ, 不断のシンボル形成活動を行いつつ言語の正真正銘にして外見的な, しかも自立的な創造原理となり得るのである。」⁹⁴⁾ 音声と, 「内部的言語意義」との結合の様式について, Humboldt は更に次のようにも語っている:「音声形体と内部的言語法則 (die innere Sprachgesetzen) との結合は, 言語の完成体を形成する。そ

94) W. v. Humboldt: Ges. Schr. Bd. VII. S. 250ff. Werke, 1963, Bd. III. S. 650. 重要性にかんみり, 少々長い, 該当箇所の原文を示すと:

“In der Sprache…… unterscheiden sich zwei konstitutive Prinzipien: der innere Sprachsin (unter welchem ich nicht eine besondere Kraft, sondern das ganze geistige Vermögen, bezogen auf die Bildung und den Gebrauch der Sprache, also nur eine Richtung verstehe) und der Laut, insofern er von der Beschaffenheit der Organe abhängt und auf schon Überkommenem beruht. Der innere Sprachsin ist das die Sprache von innen heraus beherrschende, überall den leitenden Impuls gebende Prinzip. Der Laut würde an und für sich der passiven, Form empfangenden Materie gleichen; allein vermöge der Durchdringung durch den Sprachsin in artikulierte umgewandelt und dadurch in untrennbarer Einheit und immer gegenseitiger Wechselwirkung zugleich eine intellektuelle und sinnliche Kraft in sich fassend, wird er zu dem in beständig symbolisierender Tätigkeit wahrhaft und scheinbar sogar selbständig schaffenden Prinzip der Sprache.” 訳文下線は筆者。

してその言語完成の最高の地点が何にもとつくかと言え、それは、これら要素の結合がきまっ
て言語を造り出す精神の同時的行為として遂行され、真に純粋な浸透と化さざるを得ないとい
う事実にもとづいているのである。第一の要素の側からすれば、言語の造成は合成的手順(syn-
thetisches Verfahren)である。そしてかかるものとしてこそ語にたいする最も純正な理解が
可能になる。そこでは、合成が何ものかを創造するのであるが、そのものは、切り離された部
分としては単独に存在し得ぬのである。』⁹⁵⁾ここに、Humboldt が *der innere Sprachsinn*
を称し、それが分節された音声、つまり音声形体によって受けとめられるところの形体である
と考えたものに我々は注目したい。「内部的言語形体 (*die innere Sprachform*)」と言い、
「内部的言語法則 (*die inneren Sprachgesetzen*)」と称するものは、音声形体によってす
でに受けとめられたところの「内部的言語意義」であると理解すべきではなからうか。もし、こ
のような理解が誤りであるとすれば、Humboldt のこれらの発言は、用語の混乱にもとづく
ものであるのかを問わねばならない。だが、Humboldt は、Form と Stoff に関して、次の
ように書いている。

Der wirkliche Stoff der Sprache ist auf der einen Seite der Laut überhaupt, auf der andern
die Gesamtheit der sinnlichen Eindrücke und selbsttätigen Geistesbewegungen, welche der Bil-
dung des Begriffs mit Hilfe der Sprache vorausgehen. ⁹⁶⁾

他の多くの論及と、ここに結晶した思索から判断して、我々は「内部的言語意義」と「内部
的言語形体」及び「内部的言語法則」とが、決して用語の無秩序によるものではなく、それぞ
れ厳格に区別された内容を有することが理解できよう。つまり、「意義 (-sinn)」は「形体
(-form)」形成以前の何ものかであり、言いかえれば「感覚的印象と自立的精神運動の総
体」であるとみなしてよいであろう。そして「内部的言語法則」は「形体」の総和(又は総
体)と理解すべきであろう。

このように、理解された「内部的言語意義」と音声一般、「内部的言語形体」と音声形体と
の関係は、一世紀余を経た言語学の発展を知る我々にとっては、容易に、しかもおそらく正當
に理解できる筈のものである。なぜなら、de Saussure 以前には、言語学史が示すように理



第2図⁹⁷⁾

95) *ibid.* S.95: Werke, 1963. Bd. III. S. 473.

“Die Verbindung der Lautform mit den inneren Sprachgesetzen bildet die Vollendung der Sprachen, und der höchste Punkte dieser ihrer Vollendung beruht darauf, dass diese Verbindung, immer in gleichzeitigen Akten des spracherzeugenden Geistes vor sich gehend, zur wahren und reinen Durchdringung werde. Von dem ersten Elemente an ist die Erzeugung der Sprache ein synthetisches Verfahren, und zwar ein solches im echtsten Verstande des Wortes, wo die Synthesis etwas schafft, das in keinem der verbundenen Teile für sich liegt.”

96) *ibid.* S. 50. Werke, 1963. Bd. III. S. 422. 下線は筆者。

97) F. de Saussure: Cours. p.99 et p.158.

解され難かったこの Humboldt のことばは、人々に、F. de Saussure が、おそらくは 1910-1911年にジュネーブ大学の黒板に墨書した図（第3図⁹⁷⁾）を想起させるからである。

このようにして、我々はふたたび、言語記号の成立について、Humboldt の思索と de Saussure のことばで語るができるのである。

（紙幅の都合で以下次号。次号の内容は、ほぼ次のとおり：

3. 「精神的中間世界」の仮説、（続き）
4. 「精神的中間世界」の母国語的性格、
5. 「精神的中間世界」は「言語的中間世界」であることについて、
6. 「母国語的世界像」の構造と形成、
7. 批判的結語.）。